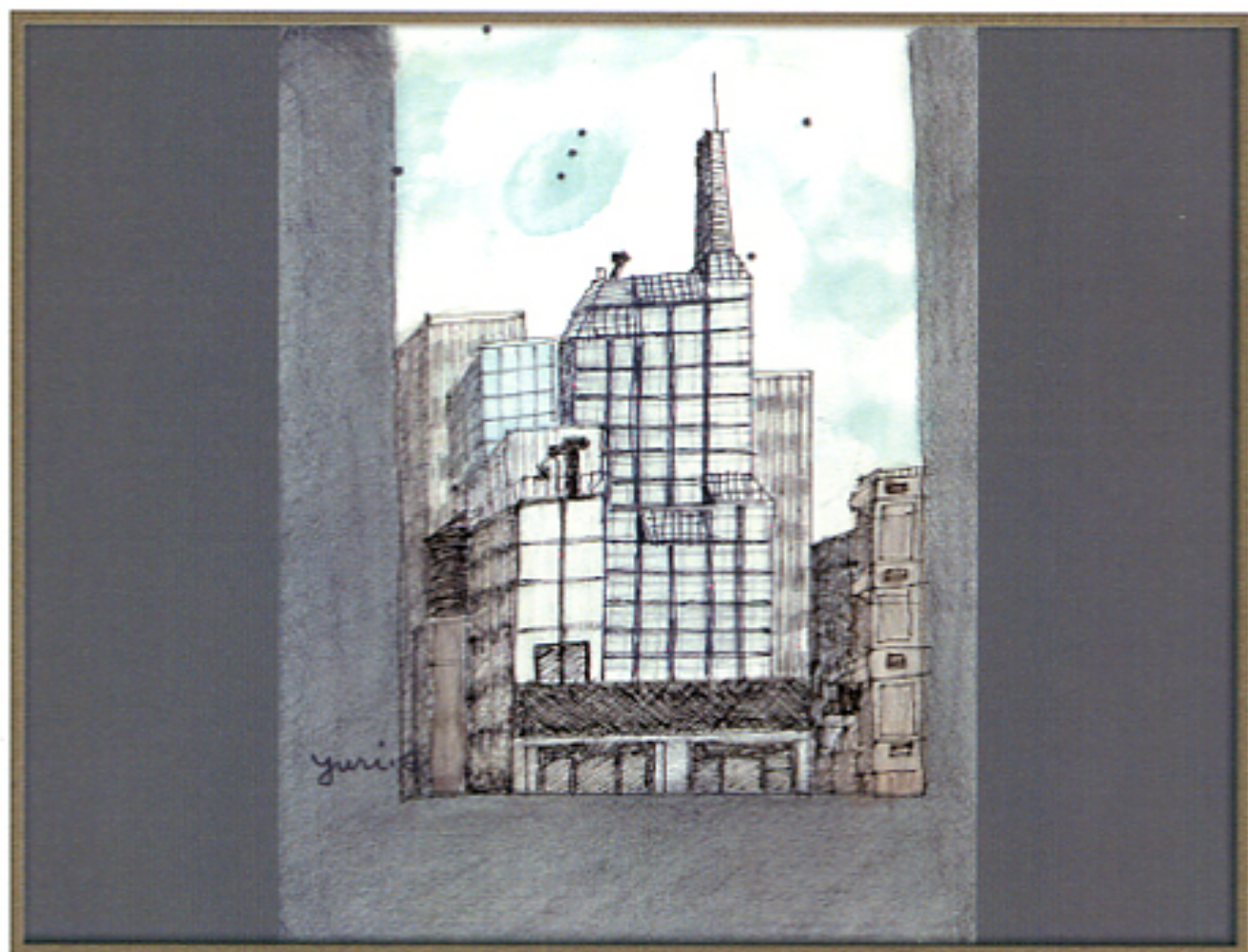


定年俳句誌

11 2012年  
月 号

かたね



# 黒羽集

(十一)

佐藤喜仙

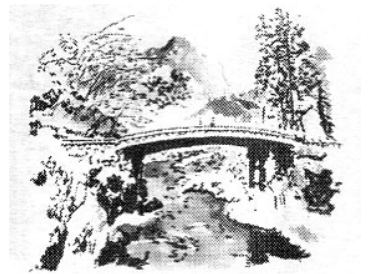
庭園の香りを余す椎の花

咲き残る空木の花や秋の風

からむものなき烏瓜地に這ひぬ

秋薊の絮蝶のやう舞ひ去りぬ

独楽の澄むさまに竜胆咲きてをり



掃く人の影無き道の木槿かな

乾坤をあまねくおほふ秋暑かな

降り出せば雨脚見えぬ白雨かな

菓子折りとことわり状や秋湿り

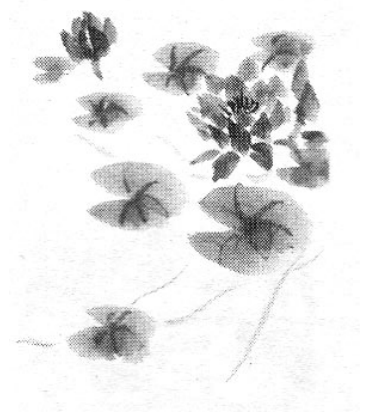
小坪にも地虫鳴きをり都会の夜

秋の空雀の色のきはだてり

行く夏や岸にころがる花火殻

# かせね集

## 白選句集



「秋めく」

松本周二

「鬼やんま」

古川千鶴

なにかも覆ひ尽くして葛の風

目玉から近づいてくる鬼やんま

式部の実詩人の好む懐古かな

新涼の笹寿司の葉のみづみづし

惜しむものあるや忙しきつくつくし

押入の救急袋震災日

蟻螂のゆつくり鎌をもたげたり

銀盤を滑るがごとくあめんぼう

蒼天に蝸の声吸はれゆく

七色の風の喜ぶ大花野

硝子戸に寄れば新涼伝はりぬ

尾根越えてなだれ落ちくる霧の波

# 「走り蕎麦」

川井素山

# 「冬の海」

菅原 孟

天守閣信長も見し青田かな

古色残る蔵の喫茶や夏の川

夕日落ちうすき白帆や遠花火

浴衣端折り徹夜踊りの下駄の音

北限の昆布干す浜番屋の灯

山寺や旅の終りの走り蕎麦

降り注ぐエンジェルラダー冬の海

冬富士の見下す磯に竿しなる

寒海苔を搔くは媼の楽しみぞ

牡蠣食へば耳に涛音氷見港

流鏝馬の一の矢放つ冬の浜

佐渡へ行く船に群れくる冬鷗

# 「木守柿」

安藤虎酔

やうやくに梨棚を出で腰伸ばす

虫喰ひの葉陰に一つ秋茄子

クラブ振る朝露に裾濡らしつつ

蓮開く木魚たたける音出して

言葉なく鍬振る人の汗みどろ

木守柿鳥のめぐみに残しけり



# 撫子集

## 主宰選



小池清司

落鮎や箔の剥げたる仏たち

引き潮や喧騒去つて鱗雲

行合の空はるばるとあきつ飛ぶ

煉瓦古りて学生街の秋澄みぬ

方丈の渡り廊下やこぼれ萩

湿原にきしむ木道水芭蕉

それぞれの尾根に朝焼八ヶ岳

板の間に胡坐の宴会火取虫

湯殿への石段暗し法師蟬

騒雨来て雨漏る山の弓道場

米田文彦

田島昭久

豆腐売り残暑の中にラツパ吹く

何時の間に雲は変わり秋の空

街中の老人ホームの残暑かな

水引草森の小径に沿ふて咲き

花壇には隙間目立ちて秋の風

雨上り声に張りある秋の蟬

山道の小さきすすきの穂の長き

穂のかたきすすきの原の光りをり

落ち木の実道を踏み分け山デビユ一

朝夕の風に小さな秋とらふ

本郷宗祥

高齢者の免許講習秋暑し

岡野安雅

窓開けて眠りを誘ふ虫時雨

蓑虫や帰りを急ぐ一人つ子

山麓の灯火の柔し秋の風

菊の日や天橋立の股のぞき

木陰道抜けて辱暑に身を晒す

小林美登里

一管の笛からはじまる秋祭

石塊に戻る仏雲の峰

秋宵や水平線の薄明

山城の礎石浮き上がる良夜かな

秋のあさ影やわらかく細くのび

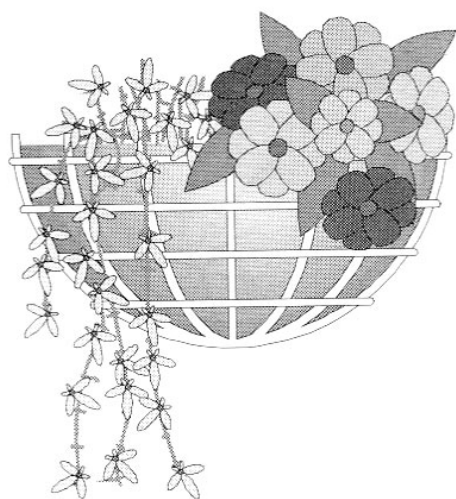
山本達人

雲はしり稲穂は風に舞ひてをり

秋の出雲万古の命脈神威あり

軒下に薪高くつみ冬支度

萩咲いて影の長さの移りゆく



# 那須野集

## 主宰選



寡黙なる二人をつなぐ虫時雨

長久保郁子

焼きトンの暖簾くぐればぬくめ酒

丸山酔宵子

路地裏の秋の簾の風まかせ

秋空の星をたどれば鳥となり

コオロギのけたたましさが遠のいて

雨上がりカーブを切れば秋の虹

長き夜の詩集に残る虫の脚

初物の松茸香る酒の友

灯を消して広がる闇に鉦叩

畦道の溜りに映る望の月

パンパスの大きく揺るる秋の暮れ

青木英林

秋の暮茶室に残る香りかな

吉田啓悟

暑き日や風力発電の酒田港

震災忌雨音強しひもすがら

二人連追ひこしかねる月明り

思ひ出せぬ名刺の人や银杏散る

畦道の色彩一変彼岸花

夕闇や板戸にうかぶ紅葉の絵

古民家にオカリナを聴く月夜かな

秋の暮水琴窟の音聞きて

魂迎ふ風ざわめける声に似て

池内とほる

花籠の桔梗一輪友を待つ

後藤克彦

みすずかる信濃の嶺々や星月夜

畦道に赤い帯引く彼岸花

姥捨の空狭くする天の川

湯煙の道に溢るる秋の暮

伊那谷の空の限りを月渡る

山中の外湯に見上ぐ秋の月

波に揺れ崩れまた寄る湖の月

秋の暮友に誘はれ名湯へ

よちよちと番の雉鳩栗実る

柳田皓一

門前のカンナの花や浜の家

菊地崇之

寺町の並木の黄葉散り初むる

法師蝉鳴き声帰路の足軽し

丸々と毬藻のごとき栗の毬

草むしる隅に残りし秋茗荷

騒がしや秋の蝉鳴く森の中

稜線へ歩み励ます濃竜胆

風さやか雲流れゆく秋の朝

薄紅葉葉先いろ濃き園の中

どくだみや明治の母の常備薬

橋本修平

足早に迫まる夕闇秋の暮

吉田博行

どくだみを煎じし土瓶棚の隅

鳴きながら飛び去る鳥や秋の暮

うつすらと風青みけり今朝の秋

空高し飛行機雲のどこまでも

挨拶もそこそこ過ぐる残暑かな

山上の一朶の雲や秋高し

ひつそりと声馴らしをる昼の虫

ジュウジュウと焼いた秋刀魚と酒の友

冷まじや人があふれし未来とは

長島清山

日記書く合間に聞ゆ虫の声

森岡陽子

一億に今よみがへる広島忌

秋の夕家路に急ぐ影も早

万緑や屋上緑化に蝶の来し

屋形船の献立かはり秋の宵

きらきらと隣家光れる炎暑かな

さざれ石古刹のすみの彼岸花

万緑や遠き電車の消へて行き

風立ちてコスモスの茎からみ合ふ

救急車よそごとならず熱帯夜

池田正江

盆の月ビルの間より浮かびけり

和田勝信

コスモスの迎へてくれし無人駅

墓参り寺の瓦の黒光り

メダル掲げ歓喜の声に光る汗

コスモスや宿題抱え子ら通る

西日負ひ飛ぶ激安の声高し

立秋や田圃に動く雲の影

深夜まで五輪を見ては昼寝かな

秋の日や長き釣竿広瀬川

ひぐらしや三百段の奥の院

田中清秀

蝉の声樹の上高き秋の暮

秋立つや背丈比ぶる影法師

参拝の手水に並ぶ秋はじめ

コスモスの畦に数本青き空

撫子集・那須野集鑑賞 八月号より

客員 村上克哉

撫子集

白鷺の木となりてをり夕薄暑

小林美登里

立夏を迎える頃のやや汗ばむほどの暑さを薄暑といい、肌に触れる風や光も柔らかく新樹の光もまぶしく感じられる。暮れなずむほっとした夏の夕方に、身動かずじっとしている白鷺、その美しい姿に引きずられず、首が長く黒くなった噂の大鷺を木と捉えた感覚、薄暑との取り合わせ的確。

地下鉄に鬼灯市の客も乗り

小池清司

七月九日、十日は観世音菩薩の結縁日でこの日に参詣すれば、四万六千日分のご利益があると言われる。浅草観音が特に有名で、当日の境内は青鬼灯を売る店で埋まり、豆絞りの手拭いの振じり鉢巻の売り子や打ち水された青鬼灯は涼しげである。浅草から一目でそれと分かる行灯造りの鉢植えを下げた老

夫婦が地下鉄に乗ってきた。きっと功德が有るでしょう。

やはらかな緑を透かし梅雨晴間 本郷宗祥

六月十日前後から約一カ月間降り続く梅雨の最中に、ときに数刻あるいは一二日気持ち良い晴れ間が見られることがある。梅雨晴れ、梅雨晴間とも言う。折から若葉の緑は心洗われるようで、目覚めるような澆刺とした感じと、日差しに透き通る柔らかさを感じさせる気持の良い一時である。

岩山の穴きはだたす夏の月 米田文彦

枕草子に「夏は月、月のころはさらなり、闇もなほ」とあり、夏の月は多くの和歌や俳句に詠まれている。月と言えば秋月であるが、夏の月は秋に劣らず見事である。昼間の暑さから解放されて見上げる空の月は思いがけない明るさと、大きさに驚くことがある。岩山の穴を際立たせるほどに明るく照らす夏の月は李白や白楽天の詩を思い起こす。(以下略)

# 伝言板

## 1 第十一回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2012年11月9日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室(別添地図参照)

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

## 2 第十二回本部句会

①日時 2012年12月14日(金)

14:00～17:00

その他事項は第十一回と同じ

## 3 吟行(2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第十一回吟行(原則第四火曜日)

日時 2012年11月27日(火)

13:30～15:30位

場所 新宿御苑

集合 新宿御苑正門前

入場料 各自負担 200円

②第十二回吟行

日時 2012年12月25日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第十一回と同じ



## 4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

## 会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

# 「かさね」俳句の基本

## I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

### ① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

### ② 有季の原則

#### 原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

#### 原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

#### 原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

#### 原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

#### 原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

### ③

## 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

## II

### 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、けけん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

## III

### 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。